

# お薬のしおり

## 逆流性食道炎について No.127 (H24.9)

東京医科大学病院 薬剤部

最近、CMなどで「逆流性食道炎」という病気を耳にしたことはありませんか？胸焼けなどの症状は、逆流性食道炎である可能性があります。今回は、この逆流性食道炎について、病態や症状、治療方法などをお話します。

食道は、口から入れた食物を胃に送るための管で、通常は一方通行です。食道と胃の間は、下部食道括約筋という筋肉があり、食物を飲み込んだ際に関き、胃内へ食物を送り込み、それ以外の時は、食道をしめて、胃の内容物が逆流しないようにしています。また、胃では、酸性の強い塩酸と消化酵素を含む胃液が分泌されており、酸から粘膜を守る防御機能が働いています。しかし、食道にはこの防御機能がないため、胃酸が食道に逆流すると、食道の粘膜は胃酸にさらされて炎症を起こします。また、胃酸によって活性化されたタンパク質分解酵素が食道を傷つけます。その結果、粘膜のただれ（びらん）や潰瘍を生じる病気を、逆流性食道炎といいます。

この逆流性食道炎は、もともと日本人には少ない病気でしたが、食生活の変化などによって、最近、患者数が増加傾向にあります。胃酸の逆流は、油っぽいものを良く食べる方、過食の方、ストレスの多い方、太っている方、高齢で腰の曲がった方などに多く起こります。主な症状は、胃酸の逆流によって引き起こされる胸焼けや呑酸（酸っぱい液体が口まで上がってきてゲップが出る）が挙げられ、他にも胸の痛みや咳、喘息、のどの違和感、声がれなどが起こることもあります。また、不眠、食欲低下、気分不快感などが起こり、日常生活に支障をきたすことがあります。

逆流性食道炎の治療の中心は、生活習慣の改善と薬の服用です。まずは、脂肪分やタンパク質の多い食事をとりすぎない、アルコールやコーヒーを減らす、適度な運動で肥満を解消する、前かがみの姿勢を避ける、ベルトなどお腹を締め付けるものは身につけないなど、生活習慣を変えることが重要です。多くの方は、これらの治療で食道の炎症や症状は良くなりますが、ま



れに手術や内視鏡を使った治療が必要になる方もいます。

次に、治療薬について当院採用薬を中心に紹介します。逆流性食道炎を治療する薬剤は、以下の4種類が挙げられます。(カッコ内は当院採用薬名)

### ①ヒスタミンH<sub>2</sub>受容体拮抗薬 (H<sub>2</sub>ブロッカー)

胃酸を分泌させる化学物質であるヒスタミン、ガストリン、アセチルコリンのうち、ヒスタミンが受容体と結合するのを防ぎ、胃酸の分泌を抑えます。主な副作用は、発疹、便秘、下痢、口の渇き、食欲不振などがあります。(ガスターD、ザンタック、プロテカジン、アシノン、タガメットなど)

### ②プロトンポンプ阻害薬 (PPI)

胃の壁細胞に存在する、胃酸を分泌する最終段階であるプロトンポンプに、結合することで、その働きを直接抑え、胃酸の分泌を抑えます。症状がある時に使われるだけではなく、再発を繰り返す場合には、再発防止のために薬を服用し続けることもあります。主な副作用は発疹や肝障害などがあります。(タケプロン、パリエット、オメプラール、ネキシウムなど)

### ③粘膜保護薬

食道の粘膜を覆い、逆流した胃液から食道を守り、炎症の改善を助けます。上記の胃酸を抑える薬剤と一緒に使われることが多い薬です。主な副作用は便秘や下痢などの副作用があります。

(ムコスタ、プロマック、セルベックス、ガスロンなど)

### ④制酸薬

胃で分泌された胃酸や、食道に逆流してきた胃酸を中和して、食道粘膜が傷害される程度を軽くしたり、症状を速やかに和らげたりします。粘膜保護薬と同様に、胃酸を抑える薬と一緒に使われます。主な副作用は便秘や下痢などがあります。(炭酸水素ナトリウム、マグラックス、酸化マグネシウム、マルファなど)

逆流性食道炎は、治療の継続が非常に重要で、自覚症状がなくなっても、食道の炎症が残っている場合もあります。また、治療中止以降の再発率は、6か月後で89.4%と非常に高いです。このため、症状改善後も、薬を飲み続けることで再発を予防する治療(維持療法)を行うこともあります。この場合は、長期間、薬を飲み続ける必要がありますが、再びつらい症状で苦しまないためにも、主治医とよく相談し、治療を続けていきましょう。薬のことで何か疑問やご不明な点がある場合は、薬剤師までご相談ください。

